

2026年3月29日 第二礼拝

説教題『強いられた十字架』マルコによる福音書 15 章 16～32 節

主任牧師 加藤 誠

「そこへ、アレクサンドルロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が、田舎から出てきて通りかかったので、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた」(マルコ福音書15章21節)

今朝のマルコ福音書の十字架には、人間の持つ闇の深さが「これでもか！」というほど描かれています。この箇所を読みながらヨハネ福音書 1 章の言葉が響いてきました。「命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている」(ヨハネ 1:4-5)。十字架は、私たち人間が抱えている闇そのものです。同時に十字架は私たちを照らす命の光である。これが聖書のメッセージです。人間の闇と神の光。その両方が十字架において分かちがたく重なっているのです。人間の抱える闇とはどういうものでしょうか。たとえば、白を黒と言いくるめ真実を捻じ曲げていく権力の「どす黒さ」。一人では言えないのに大勢の側に立つと大きな声で非難を始める「狡さ」。口ではきれいごとを語りながら肝心なところでは逃げてしまう「弱さ」。この「どす黒さ」「狡さ」「弱さ」はいずれも、わたし自身が抱えている闇です。しかし、その深い闇と共にあり続ける神の愛の光が、今日も十字架から私たちを照らし続けているのです。

今朝はキレネ人シモンに注目したいと思います。たまたま通りかかったエルサレムの街中で、いきなり主イエスの十字架を背負わされたシモン。そのことゆえに、イエス・キリストと分かちがたく結びつけられ、神の国の救いに導かれたシモン。

キレネは北アフリカの町。シモンの肌の色はたぶん黒かったと思われます。体格もよかったですでしょう。だからイエスを取り囲んでいた人混みの中で目立ち、ローマ兵から目をつけられた。21 節「無理に担がせた」は「強制徴用」という言葉です。当時、ローマ兵はいつでも民間人を強制徴用できました。ローマ兵が槍の先の平らなところで肩を叩いて「おい、これを運べ」と命じたら、誰も逆らえませんでした。

後に、このシモンは初代教会でも良く知られたリーダーになります。有力な説では、アンティオキア教会の「ニゲルと呼ばれたシメオン」がこの人であると。シモンがどのようなプロセスでクリスチャンになったのかは分かりませんが、一つ明確なことは、このときシモンは主イエスの十字架と分かちがたく結びつけられてしまったということ。シモンは世界でたった一人、主イエスが背負われた十字架の実際の重みを体験した人。また主イエスに向けられたあらゆる罵詈雑言を、群衆の側ではなく、主イエスの側でただ一人、一緒に浴びて受けた人。そして、十字架上の主イエスの苦しみ、荒い息、呻き、叫び、そして血の匂いを一番間近で受け取り、ローマの百人隊長の「ほんとうにこの人は神の子だった」という信仰告白を自分の耳もとで聞いたのでした。シモンは、人間の持つ罪のどす黒さとその重さを、その体で、肌で、耳で、目で、鼻で、

五感のすべてを通して刻みつけられてしまった。同時に、それだけの暗闇の深さにもかかわらず、「この人こそほんとうに神の子だった」という救いの言葉を彼は聞いたのです。人間はいくらでも悪魔になりうる。こんなにもひどい暴力と言葉で他者の尊厳を奪い、命を奪うことのできる、罪深い存在である。しかし同時にシモンは、人間のどうしようもない罪をすべて引き受けられた神の子の祈りと愛の深さに、このとき分かちがたく結びつけられたのでした。

ローマの信徒への手紙によると、パウロはシモンの妻のことを「自分にとって母のような存在だ」と書いてますから、最初はクリスチャンの迫害者だったパウロをあたたく迎えて世話をしたのがシモンとその家族だったのかなと想像します。家族みんなでクリスチャンとして生きる喜びにあずかり、アンティオキアの教会の働きを喜んで担う者とされたシモンを思うとき、最初「強いられて担がされた十字架」は、このあと「神の恵みの十字架」に変えられていったということでしょう。

女優の大竹しのぶさんが若い時に、演劇でヘレンケラーを育てたサリバン先生の役をやることになった時のこと。障がいのない大竹さんは、耳は聞こえない、目は見えない、話すこともできない、その三重苦を理解しようと、障がい者施設を訪ねます。その施設には9歳の三重苦の男の子がいました。大竹さんは、その少年とどのように気持ちを分け合うか、戸惑います。ふと思いついたのが、ハグをして心臓と心臓を重ねることでした。ハグをすることで心臓の鼓動を感じ合うことができると思ったからです。この様子を見ていた職員が「少年は日ごろめったに見せることのない笑顔で、大竹さんとハグしていた。気持ちが通じ合っていたのです」と話したそうです。

この出来事になぞらえるなら、十字架の場面でシモンは、主イエスの心臓の鼓動を感じ取る体験をしたのではないかと思いました。主イエスの荒い息、呻き、叫びと血の匂い。人間が味わう苦しみの極限を御自身のものとされる神の子の心臓の鼓動を、シモンはこのとき受け取ったのではないか。しかし、その前に目をむけるべきことがあります。シモンが主イエスの心臓の鼓動を感じ取る前に、まず神の子である主イエスがこの世界で理不尽で不条理な苦しみを背負わされている一人ひとりと心臓を重ねてくださったという事実。そして、その理不尽で不条理な苦しみを与えている悪魔のような人間の罪をすべて受けつくし、十字架につけてしまわれたということです。

ここに十字架の救いがあり、ここに私たちを愛してやまない神の救いがあります。シモンは十字架につけられた主イエスの心臓の鼓動を感じながら、十字架の救いの真理をその心と体で受け取ったのでした。今も世界を覆う私たち人間のどす黒い罪の深さを思います。しかしこの世界を救う光が、十字架から今日も私たちを照らしています。私たちを神の国の喜びと安らぎに導くこの光に照らされながら、「この方こそほんとうに神の子である」という福音を歩んでいきたいのです。